

ねりま小中一貫教育レポート

○●○ 第 24 号 ○●○

平成 26 年 5 月

発行：教育企画課・教育指導課

「ねりま小中一貫教育レポート」は、小中一貫教育の取組を全校で共有するため、随時発行しています。第 24 号では、平成 25・26 年度小中一貫教育研究グループに指定されている「田柄中・田柄小・田柄第二小」グループの取組について紹介します。

◆年間 11 回の小中合同研究会

田柄中グループでは、今年度 11 回の合同研究会（全体会）が年間計画に位置付けられ



ており、3つの部会ごとに課題改善カリキュラムの検討や作成したカリキュラムの実証授業などを行う計画です。合同研究会のほか、田柄小と田柄第二小の打合せ日として、教科部会を年 8 回設定しました。

4 月 23 日、田柄中グループの全教員が集まって第 1 回合同研究会が開かれました。3校の連携クリエイターがオリエンテーションを行ったあと、3部会に分かれて研修と話し合いを行いました。

◆算数・数学部会（部会員 23 名）

算数・数学部会では「算数・数学的活動を通して、児童生徒の考える力を高める指導の在り方」を部会研究テーマとし、図形領域に絞って課題改善カリキュラムの作成を行います。

【講師：東京学芸大学講師／荒木正志先生のお話】

初めに、算数・数学の小中一貫教育で先生方のやりたいことは何か、ということをお願いしたい。図形の学習では、論証が必要だが、論証は見えない学力である。見えない学力を育てるには、どうしたらよいか。論証の力、論理的に考える力を小中でどうやって育てるのかを考えなければならない。課題改善カリキュラムを急いで作るのではなく、子供たちにどんな力をつけたいか、小・中教員がじっくり意見を出し合うことが大事である。



◆理科部会（部会員 22 名）

理科部会では「児童・生徒の体験や気づきを活かして考える力を高める指導の在り方」を部会研究テーマとし、物質・エネルギー領域に絞って課題改善カリキュラムの作成を行います。

【講師：清瀬市立郷土博物館館長／森田善朗先生のお話】



理科を学習するうえで、生活体験は非常に大切である。理科は小学校3年からではなく、生活科で中学までつなげる体験をさせるようなカリキュラムを考えなければならない。

生活科の体験が理科につながっていく。

カリキュラムを作成するにあたって、小中の指導項目のつながりを考えるだけでは浅い。小学校のこの単元で何をしっかり押さえれば中学校のこの学習にスムーズにつながるか、というところまで考えなければならない。そして、押さえるべきところを定着させるために、何を体験させるかを考える必要がある。

◆特別活動部会（23名）

特別活動部会では「主体的な話し合い活動を進めるための指導の在り方」を部会研究テーマとして、学級活動を中心に課題改善カリキュラムを作成します。

【講師：帝京大学准教授／若林彰先生のお話】

小中一貫教育の柱のひとつに異学年交流がある。

学校教育というのは、学年ごとの輪切りで活動することがほとんどであるが、社会に出たら、いきなり異年齢交流になる。異学年交流で人間関係を拡大し、思いやりやあこがれを育てていくことが重視される。

特別活動というのは、自主的・実践的活動でなければならない。学級というのは、もともと大人の都合で決めた集団である。この集団を心のよりどころとなる「準拠集団」に高めていくのが特別活動になる。



◆小中一貫教育を進めるための工夫

田柄中グループでは、田柄中と田柄第二小は隣接していますが、田柄小は徒歩20分ほどの距離があります。また、田柄中は15学級、田柄小は18学級、田柄第二小は21学級と比較的規模の大きな3校ですので、教員数も70名近くになります。

こうした条件の中で年間11回の合同研究会を行うために、集合時間を小学校は14時半、中学校は15時とずらして設定する回を設けて、授業時数の確保に配慮しました。

約70名の教員が3部会のいずれかに参加しますと、部会の人数が20数名となりますので、部会をさらにⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期などの分科会に分け、それぞれ分科会リーダーを決めました。

こうした重層的な組織のなかで、課題改善カリキュラム一次案の作成⇒課題改善カリキュラムに基づいた実証授業⇒課題改善カリキュラムの修正⇒次年度に向けた取組の計画、というPDCAサイクルで小中一貫教育を進める計画です。